障害児教育実践センター研究紀要　第４号，21-30，2005

＜原著論文＞

# 弱視通級指導教室における指導内容に関する検討
## ── 広島市立本川小学校の実践から ──

樋口　正美＊

樋口（2005）では，本川小学校弱視通級指導教室の運営について現状と課題を報告した。本稿では，その中で十分でなかった指導内容について整理していく。これまで指導した弱視児の学習環境を考えた上で，指導計画の立案方法や，指導内容を振り返り整理するとともに，課題をまとめていきたい。

キーワード：弱視通級指導教室，指導内容，評価

## Ⅰ　はじめに

本校弱視通級指導教室は昭和54年，弱視特殊学級として設置された。平成13年度より通級指導教室となり，現在５年目を迎えている。今年度，通級児童は10名である。開室時からこれまで，通級終了生を合わせると，延べ18名の児童を指導してきたことになる。ケースとしては多くないが，４年間運営に関わり，その中で浮かび上がってきた弱視児の普通学級での学習の現状を踏まえ，指導方法，指導内容を整理することとした。

## Ⅱ　問題の所在と研究の目的

### １．問題の所在

#### １）学習環境の把握

通級指導教室での指導内容を組み立てる上で，在籍学級での学習環境の把握は欠かせないものである。教員採用後は盲学校教員として勤務してきたため，普通小学校の経験のない筆者がそのことを理解するためには，多くの時間を費やした。把握の方法としては，在籍学級への訪問，弱視児の在籍の有無に関係なく普通学級の一斉授業の観察，同じ校内の普通学級の担任から学級経営に関する情報を得るなどである。また，自分自身が一斉授業を受け持つ機会も作り，担任教師がどのくらい弱視児に配慮をできるのか，目を配れるのかを自分の経験から推測し把握していった。

また，把握する内容としては，児童の学習活動（読む，視写する，考える，作業する，発表するなど）がどのようにどのような速さで展開していくのか，教師の提示する教材の大きさや内容，提示するタイミング，発問の仕方などである。

#### ２）実際の学習環境

普通小学校に勤務して特に感じるのは，常に児童が直面している問題が学習スピードの速さである。何事にもスピードがつきものである。限られた時間数の中でこなさなければならない学習内容が多いので，障害の有無に関わらず時間を有効に使いながら教師も児童も学習に向かっているということ現状である。

そのような中で１単位時間の普通学級の学習時間の中での弱視児にとっての課題を４点に整理した。

第一は，弱視児は学習や作業に時間がかかることが多いことである。テストやプリントにおいて，名前を書く位置を見つけたり，どこにどんな問題があるか把握したり，図表などの位置の確認などで時間を取る。また，読む速度も遅い場合はさらに時間がかかる。図画工作など時間がかかる活動である。時間内にできないことがあったり，どうしても難しかったりする場合は，担任教師と話し合い，その時間のねらいを明確にし，その児童にどういった力を付けたいかを考えることで，学習内容を精選する場合もある。

第二は，学習活動の多さである。１単位時間の学習活動を観察していると，児童はめまぐるしく活動していることが多い。意見交換が中心の授業は活動が少ないが，多くの授業は，読む，ノートに写す，黒板を見る，資料集を開く，消しゴムで消す，ものさしで線を引く，ドリルを出す，問題を解く，観察をするというような活動が多様に繰り返えされる。よほど，神経を張り詰めておかないと教師の指示を聞き逃したり，見落としたりすることがある。

第三は，見る活動が中心ということである。どんな

＊広島県広島市立本川小学校

細かいことでも見て学習するということが基本なので，たえずしっかり見ておかねばならない。見なければいけない範囲や量，細かさも幼児期に比べると格段と差がある。そのため，小学校入学直後はそのことにとまどう弱視児も多い。

第四は，使用する学習用具の整理に困るということである。教科書やドリル類など，採択によっては大判なものも多い。机の大きさは変わらないのに，教科書，ノート，筆箱を置くと机の上はものでいっぱいになり，ドリル類などを置くと，飽和状態になる。どこに何を置いたかをよく見て確認しておかないと授業中にものを落としたり，どこに置いたか分からず探すことに時間を要してしまったりすることもある。机の中も道具箱や教科書等でいっぱいなので，弱視レンズの置き場所に困ることも多い。

**3）問題の所在**

以上のような学習環境の中で生活している弱視児は，盲学校や弱視学級のように教材や少人数の児童に合わせた学習活動はできにくい。児童の持っている力や，人的環境（周りを取りまく人の理解），物的環境（教材や備品，教室環境）などが整っていないために学習上の困難さが生じる場合がある。前述のような学習環境をふまえ，今回は，児童の持っている力に焦点を当て，学習上の困難さを伴う理由は２点にあるのではないかと考えた。１点は見えにくさからくる学習作業のスピードの低下であり，第２点は，細かいところまで注意して見ることができる力があるか否かである。これらの力は，どのような指導方法及び内容で獲得，定着させていくかを考えていきたい。

**2．研究の目的**

本研究では，在籍学級における多様な学習環境を踏まえ，見えにくさからくる学習の困難さに焦点を当て，それを克服するための系統的な指導方法及び内容を明確にしていく。さらに，中学校進学後の状況までも考えると，専門の教育機関が少ないこと，小学校の学級担任に理解してもらうべき内容が教科担任全員に理解してもらわなくてはならいことなど，できる限り児童に力をつけておくこと，将来の自立を考えた指導内容でなければならないと考えている。そのため本稿では，通級指導教室における「特別の指導」のうち「自立活動」の指導内容に焦点をあてることとする。

本研究では，これまでの実践を整理することにより，小学校における弱視通級指導教室の６年間で児童につける力を明らかにするとともに，これまでの指導内容が適切であったかどうか考察していくこととする。

## Ⅲ　実践的研究

**1．指導計画の立案**

通級することが決定すると，児童の眼疾患，視力値，学習の定着状況などから指導計画を作成していく。その際，指導者自身が持っておかなければならないと考えているのは「目指す子ども像」である。ここで，本通級教室の「目指す子ども像」は次の２点である。

・自分が見えにくいことを理解し，人に伝えたり，説明したりすることができる。また，適切な援助を求めることができる。
・自分でできることは最大限に努力する気持ちを持つ。

これは，小学校６年間の指導の中で，指導者が保護者や担任とともに，こういう児童に育ってほしいという願う子どもの姿である。単に技術的な向上や学力の向上だけでなく，生きていくために一番重要な力だと考えている。そしてこれは，主として自立活動の領域を指導していく中でつけていきたい力である。

指導計画の立案に際しては，まず，目指す子どもの姿をイメージしながら，現在の児童の実態をふまえ，どんな指導内容が必要か考えていく。次に，そして今年度の付けたい力を見通した目標を立て，その目標を達成するために各学校のシラバス等を参考に，どの時期にどんな内容を指導していくかを考え，年間指導計画を作成している。具体的には，「児童の障害について」「児童の実態とつけたい力」「学習内容」「学習日程」の４項目について整理している。なお，表１には，低学年のある児童の年間指導計画の中の「学習内容」の部分を示した。作成する際には，保護者，担任の了承を必ず得て立案するようにしている。

**2．指導の方法及び内容**

通級指導教室で指導できる内容は限られている。いろいろな力をつけたいと思っていても週に１回２，３時間程度の指導時間で目標を達成しなくなくてはならない。児童に必要な指導内容を考え，優先順位をつけて指導に当たっている。本通級指導教室では，次の「弱視レンズ活用訓練」，「書字指導」，「読速度向上指導」，「作図技術の向上指導」，「用具の使用技術の向上指導」，「視知覚学習」，「教科補充的指導」を設定している。次にそれぞれの指導の方法と内容を述べる。

表１　年間指導計画　学習内容

| 項目 | | | 目標 | 学習内容 | 学期 |
|---|---|---|---|---|---|
| 弱視レンズ訓練 | 遠用弱視レンズ訓練 | 基礎訓練 | ○瞬間視<br>1カード1/2秒以内で認知する。 | ・指導者の提示する文字カードを瞬間的に認知する。 | 年間を通して |
| | | | ○動体認知<br>正答率　80% | ・指導者の提示する文字カードをピントの最も遠い位置、最も近い位置から自分でピントを回し認知する。 | |
| | | 応用訓練 | ○短文読み<br>1文字0．6秒で認知する。 | ・黒板に板書された縦書き、横書きの短文を素早く探して読む。 | |
| | | 広視野訓練 | ○直線たどり　交差なし<br>1問　6秒 | ・スクリーンに映し出された交差のない直線をたどる。 | |
| | 近用弱視レンズ訓練 | 基礎訓練 | ○短文読み<br>1文字0.4秒で認知する。 | ・8Pの大きさの文字で書かれた短文カードを素早く読む。 | |
| | | 広視野訓練 | ○直線たどり　交差なし<br>1問　6秒 | ・B4の用紙にかかれた交差のない直線をたどる。 | |
| 作図訓練 | ものさし | | ○ものさしで線を引いたり、点を結んだりできる。 | ・点と点を結んで線を引く。 | 1学期 |
| | | | ○ものさしで長さを測ったり、決められた長さの線分を引くことができる。 | ・ものさしで長さを測る。<br>・30cmのものさしを使って長さを測る。<br>・30cmのものさしを使って決められた長さの線分を引く。 | 2学期 |
| 教科等に関する指導 | 漢字 | | ○既習漢字、新出漢字を止め、はね、はらいに留意しながら正確に覚え、的確に使用できる。 | ・止め、はね、はらいなどが留意できる250Pの漢字見本を見て、なぞりながら画数、書き順を正確に覚える。<br>・字形に留意しながら、正確に書けるようになるまで練習する。 | 年間を通して |
| | その他 | | ○繰り返し学習することでできるようになるという自信を持つ。 | ・学習の中で難しかったことを復習する。 | |
| 用具の使用技術の向上 | 色鉛筆 | | ○0.3mmの枠の中をきれいにはみ出さずに塗ることができる。 | ・丸や四角形、三角形、ハート型など全体の形を捉え、どのように塗るときれいに塗れるかを考えながら塗る。<br>・塗り残し、はみだしがないように塗る練習をする。 | 年間を通して |
| | はさみ | | ○画用紙での0.3mmの太さの直線切り、曲線切りができる。 | ・切っている時の視点や、手の動かし方に留意しながら切る練習をする。 | |
| | 穴あけ | | ○穴あけパンチを正確に使うことができる。 | ・穴あけパンチの使い方を理解する。 | |
| | ちょう結び | | ○ちょう結びができる。 | ・ちょう結びの練習をする。 | |
| | 絵の具 | | ○基本的な使い方を知ることができる。 | ・水入れの使い方、パレットの使い方、水の溶き方、筆の使い方等をしっかり見て落ち着いて扱うことを練習する。 | 1学期 |
| 視知覚学習 | 目と手の協応 | | ○目と手の協応動作がスムーズにできる。 | ・線たどりや点結びなどを段階的にする。<br>・なぞり書きをたくさんする。 | 年間を通して |
| | 図と地の弁別 | | ○重なり合った図が弁別できたり、重なり合った線の交差した部分が正確に認識できる。 | ・重なって描かれた図形の中から特定の図形を探し出してなぞる。<br>・交差した線を弁別してなぞる。 | |
| | 形の恒常性 | | ○いろいろな形の中から特定の形を選び出すことができる。 | ・たくさんの図形の中からある特定の図形を探し出してなぞる。<br>・たくさんのものを順序良く見ていく練習をする。 | |
| | 空間関係 | | ○平面的、立体的にものの位置関係を把握することができる。 | ・描かれたもの同士の上下左右の位置関係を弁別する。<br>・デザイン画と同じように積み木を配列する。<br>・見本の絵を模倣して描く。 | |

**1）弱視レンズ活用訓練**

(1) 活用訓練を行うにあたって

弱視レンズの使用は，小学校生活の中では全ての基盤となると言っても過言ではない。弱視レンズをどれだけ使いこなせるか，またさまざまな教材を見る場合にどれだけ対応できるかが，学習上での理解に大きく影響してくる。もちろん，拡大読書器や拡大コピーなどでの教材の提示の方法もあるが，在籍学級での学習においてはやはり限界がある。そこで，本教室では，まず視覚補助具として弱視レンズの活用技術の向上を指導の基本としている。目標は授業や生活の中で弱視レンズを使いこなせるような力をつけることである。ただし，容易に力がつくものではなく，さらに同級生等の前で躊躇なく使用できるためには，自分の障害を捉える精神面も含め，６年間という長い年月をかけてじっくり育てていくものだと考えている。

指導方法は，広島大学で作成された「弱視レンズ基本訓練プログラムレンズ」及び「弱視レンズ広視野空間探索訓練プログラム」に沿っている。この２つのプログラムは細かいステップが組まれており，確実に力が付いていくようになっている。しかし，児童の見え方，知的な課題によっては，プログラム通りに指導するのが難しい場合もあるので，合格基準や内容を個に応じて変更して使用している。さらに重要なことは，一つ一つの訓練項目の中で，弱視レンズのどのような技術を身につけさせたいのかを指導者はしっかり理解し把握しておく必要がある。この理解なしには本当の意味での弱視レンズの活用技術は身につかないと考えている。例えば，遠用レンズの基礎訓練中にあるピント合わせの指導では，提示された文字をピント合わせして何秒で読めたかという内容になっている。ここで大切なのは，弱視児が速く文字を読んだかというよりも，自分なりにピントが合ったということを実感できるか，正確にピント合わせをするということを理解できるか，主体的にピントを合わせしようとするかということである。一つ一つの訓練の意味を指導者が理解しているということが大切である。

(2) 在籍学級での弱視レンズの活用について

本教室で基礎訓練が終わる１年生の終わりから２年生にかけて在籍学級で弱視レンズを使い始める。その場合は，必要に応じて，在籍学級と連携を取り，一斉授業の中でどんなタイミングで使うのかを指導する。ただし，基礎的な使用技術が身に付いてから，弱視レンズを在籍学級で使用できない場合もあり，その理由としては２点を挙げられる。

一つは，どこで，使っていいかタイミングがわからないということである。多くの弱視児の場合，弱視レンズを使うタイミングを身につけるのが一番難しい。なぜなら，低学年の場合は特に見えている，見えていないという判断が自分でできにくいからである。見えていると思っていても見えていなかったり，見落としていたりということが多い。そこで，弱視レンズを使用するタイミングとして，教師の動きをよく目で追い，教師が板書を始めたら黒板を見るということを約束している。ここで難しい点は通級教室では，早い時期にその習慣が付くが，在籍学級では習慣が付くまでには担任や周りの児童からの継続的な支援が必要である。

もう一点は，使わないといけないと解っていても使うことに抵抗感があるということである。ある児童がクラスでなかなか弱視レンズが使えない状況にあったため，担任教師が取り組みを行った事例がある。それは，クラスの友だちに弱視レンズ（単眼鏡）を大事にするような言葉かけや，使うように促す言葉かけをさせたというものである。その結果，弱視児童にとっても，弱視レンズがとても自慢できるものになり，周りの児童にとっても素敵なものというイメージになったようである。また，別の児童の事例では，常に担任教師が提示した教材や板書を，見えるか見えないかということを弱視児童に問うことを入学当初から行ってきた。その結果，見える見えないをクラスのみんなの中ではっきりと告げることができるようになった。結果的に，周りの児童にもどんなものが見えにくく，どんなものが見えるのかが理解できるようになり，児童間で弱視レンズ等の補助具の使用についても助けたり，促したりすることができるようになった。基礎的な技術を身につけた後は，このように周りの児童への働きかけや弱視児自身の障害への気づきや受容への対応もとても重要になってくる。

学年が上がると，板書を視写するために遠用弱視レンズを使い，次の瞬間教科書を読み取るために近用弱視レンズを使うなど学習上での作業が複雑で，スピードが必要になってくる。スピードをつけるためには，前述の「弱視レンズ基本訓練プログラムレンズ」及び「弱視レンズ広視野空間探索訓練プログラム」の地道な取り組みが欠かせない。それと同時に，在籍学級でとにかく弱視レンズを使用することがスピードをつけるよい練習になっている。言い換えれば，通級指導教室においては弱視レンズの基礎的な活用練習を徹底して行い，在籍学級での活用が応用技術の習得の場である。この点においても，在籍学級の担任との密接な連

携の必要性を指摘できる。

(3) 意欲を高めるための手立て

弱視レンズは学習の中でとても重要な役割を果たしているが，それを積極的に使うように意欲を高めていくことも必要な取り組みになる。具体的には，弱視レンズを活用するゲームなどを作成してみんなで楽しく使う経験をさせたり，生活の中で実際どのように使っていくかを体験させたりしている。その一つの取り組みとして，夏休みなどに，公共の交通機関を利用して，指定した場所に出かける集団的な学習を行っている。なお，この取り組みは再度後述するが，単にバスや電車の乗り方を学習するだけでなく，時刻表なども児童だけで調べたり，昼食なども自分で購入したりするという生活一般の技能も取り入れている。様々な場所で弱視レンズを活用する場面があることはとても大きな発見になっている。また，大人に頼った中では普段はあまり意識しない周りの状況を考えていくといった機会にもなっているようである。このような教育活動は，みんなで使う楽しさや見る楽しさ，発見する楽しさを味わうことは，長い訓練を支える原動力となっているようである。

**2）書字指導**

(1) 運筆に関する指導について

書字指導に関しては，入学直後にまず，運筆の様子をみることとしている。なぞり書きの教材の氾濫のためか，なぞる線を見ながら書く経験をしていることでかなり筆圧が高い場合が多い。また，手首が思うように動かなかったり，思うように力が抜けなかったりする場合もある。そこで，まずは，自由になぐり書きをさせるようにしている。ぐるぐるとうずまきをかいたり，はらうような形の線をかいたり，いろいろな運筆や手の動きを経験させる。その際の画材は，鉛筆，水性ペン，色鉛筆，マーカー類とさまざまなものも使う。いろいろな描画材に出会わせることも児童にとっては，発見があったり，好き嫌いを克服できたりするきっかけになるようである。

(2) ひらがなの指導について

運筆が安定してきたら，ひらがなの指導に入る。筆記用具としては，入学当初は，２Ｂの鉛筆を使用させることが多いが，弱視児には，シャープペンシルを使用させることが多い。濃さは２Ｂを選んでいる。その理由としては，書いた字の太さが一定に保てるために，後から読み返すときに分かりやすい点にある。また，視力によって1.3mm，0.9mm，0.7mmなど見えやすい芯の太さを選ぶことができるのも利点の一つである。筆圧の強すぎる場合には，芯が折れたりすることなどから指導しながら筆圧を安定させることもできる。

まず，手本をよく見て書き写す練習を行う。その際のつまずきとして，視知覚の落ち込みから形が正確に取れない場合もあるが，単に視知覚の問題ではなく，

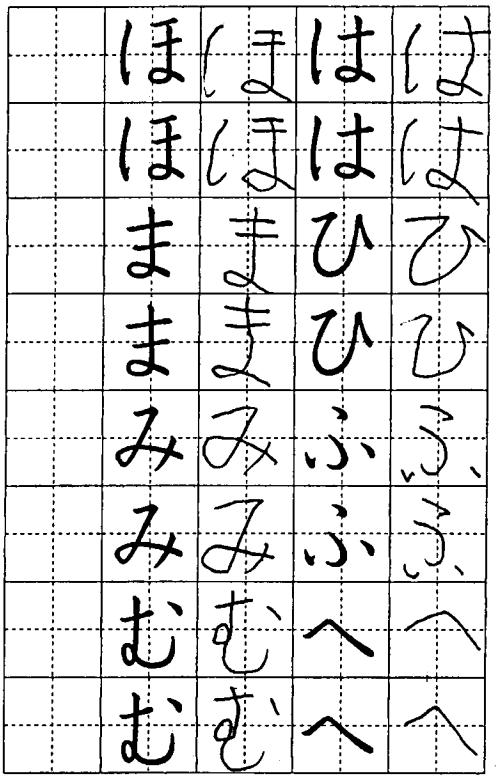

図１　ひらがな練習シート（右利き用）

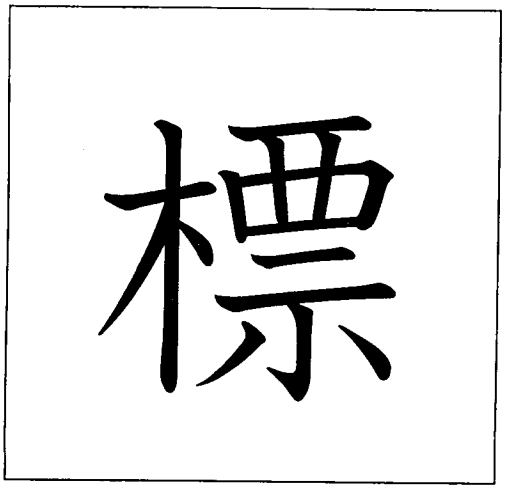


図２　漢字見本（実際は250ｐの大きさである）

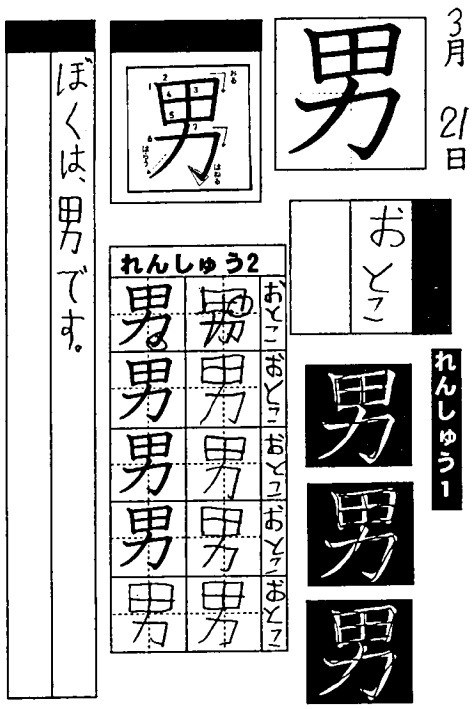


図３　漢字練習シート（１年生用）

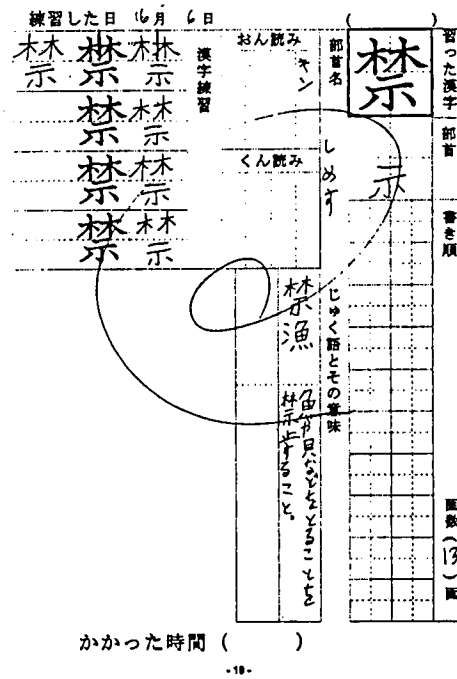


図４　漢字練習シート（５年生用）

周りのマスの線まで見る意識が育っていなかったり，大まかにしか見ていなかったりすることが原因となり，マスの中に書けなかったり，形が正確に取れなかったりすることも多い。そこで，図１に示したようなひらがな練習ノートを作成し，個々の児童に合わせて，マスの大きさや罫線の色を変えたり，手本の字の位置を利き手によって変えたりして使用させている。

(3) 漢字指導の教材について

１年生の２学期より新出漢字の指導に入る。指導に用いる教材としては，250p の大きさで書かれた教科書体の漢字見本（図２）と漢字練習シート（図３，図４）である。まずは，作成する際の目的と注意事項を述べていく。250p の漢字見本は，見やすい大きさであるというばかりでなく，なぞる指導を行うためにこの大きさで作成している。なぞることで，書き順や画数を確認できる。また，見えやすい大きさの文字を使用することで細部の止め，はね，はらいの確認をするという意味でとても有効である。次に，漢字練習シートはパソコンソフトで作成している。その漢字の書き順や読み方，用法などを記入する欄，漢字を練習したりする欄を一枚のシート内に納めている。また，練習する欄には漢字の手本を書いておき，それを見ながら漢字が正確にバランスよく書くことができるようにしている。さらに，３年生以上になると，国語辞典や漢字辞典の使い方を練習する内容も含めることもある。近用弱視レンズなどを使いながら，辞典の使用の練習を継続的，かつ長期的に行っていくことを重要視している。この取り組みより，速く調べることができると，わからないことはすぐに調べようという意欲も増してくる。狭い弱視レンズの視野で辞書を引かなくてはならないこと，晴眼児童と比較して弱視レンズという補助具を余計に使用しなくてはならないことから，細かいことでも面倒くさがらずに調べようとする気持ちは大切であると考えている。さらに，シートを作成する上で，視力値や見え方に応じて罫線の色や太さを個に応じて変更するようにしている。これは，１回作成したものが他の児童に使用できないという点で作成上の負担となっているのは事実であるが，初期的には必ず行わなくてはならない配慮と位置づけている。ただし，見る力が付いてくると市販のノートの罫線の色や太さに徐々に近づけて，市販のノートにでも対応できるようにしていく。

(4) 漢字指導の方法

指導の手順としては，漢字見本をなぞらせた後に，このシートを利用して，読み方確認する。そして，手本を見ながら書いて練習していく。書いた後は，手本

と見比べて留意して書けたか，どこがいけないのかを見直す時間を設けている。その反省を元に次のマスに写って練習するという手順を取っている。理想としては，正確に書くことができるまでは通級の指導中に練習し，その後は持ち帰って家庭学習を行い，定着を深めることであると考えているが，現実的に通級の指導中に完成させることはできにくい。児童は，在籍学級での漢字の宿題と通級での宿題とかなりの時間を漢字に費やすことになる。しかし，それでも週一回の指導のため，継続的に漢字の形などに留意させることが難しく，自分で気をつけながら，手本を見て，ていねいに書くことができるようになるまでに2，3年くらいはかかっている。ただし，この間の丁寧な指導を行うことにより，3，4年生の頃には自分で留意しようという意欲が出始めシートをやり終える時間がとても短縮され，直さなければいけないことも少なくなってくる。学年が進むと一単元毎にまとめて漢字シートを持ち帰らせても，自分で計画を立てて，期限までに取り組むことができるようになる。なお，通級による書字の指導の基本は，数をたくさん書くよりも手本をしっかり見ながら，始筆の位置や，マスの中の区切りの点線に留意させながら書くこととしている。　その他，新出漢字だけでなく，下学年で学習した既習漢字の復習にも取り組んでいる。

**3）読速度の向上指導**

読速度は，小学校で学習するためには重要なものである。一斉授業の中で音読する場合やリレー形式で音読する場合も，ある程度のスピードが必要である。さらに，学年が上がるとどの教科の中でも速く読んで課題を行う必要が出てくる。小学校内においても，毎日の宿題の中で必ず入っているのが音読である。特に1年生の間は，どのくらいたくさん読み込んだかが児童の読速度を決定しているように感じられる。一般的に弱視児童は，視距離が近く，見える文字数も限られ，頭を動かして読むためにスピードは遅い。そこで，継続的，段階的に読速度を上げる指導を行っていくことは，非常に重要である。

まずは，一番読みやすい文字の大きさを確認して読材料の文字の大きさを決定する。視機能の状態によって読みやすい字の大きさは変わるが，1年生の場合は，教科書の文字の大きさとそろえ，28p くらいから入ることが多い。経験的には，それ以上では字が大きすぎるし，それより小さくなると読む前から難しいと思ってしまうことがあることが多かった。ひろい読みをしている児童については，単語をまとめて読む練習から行い，次の段階で2文節ぐらいの簡単な短文読みの練習に入る。その後，50文字くらいの文章読みに入っている。もともと，ある程度のスピードで読める児童については，文章読みから指導を始めることも多い。近用弱視レンズの基本訓練が済んだころから，その補助具を活用しての読速度の向上訓練に移行している。

近用弱視レンズの練習での読材料は，各学年の副教材から選び，学年相当の内容（物語文や説明文）や漢字を使用している。文字の大きさは10pまたは8pとし，5p のルビを使用する場合もある。文字数も学年とともに多くしている。しかし，単語だとまとめ読みはできるが，文章になると1分間に100文字前後になるという児童には，実際に速く読んでいる他の児童の姿を見せたり，指導者が速く読んで模範を示したりすることで速く読むという感覚を理解できるようにしている。読材料に変化を持たせ，楽しいクイズ形式にしたり，文字数をかなり少なくしたりして，それを何度も読ませ，速く読めたという経験させることも有効である。いずれにしても，児童の実態に即して読材料を選んでいる。

文章読みの指導の方法は，近用弱視レンズを使用する場合も使用しない初期の段階も基本的には同じ形態をとっている。方法としては，まず一つの読材料を目標タイムで読みきることができるまで何度も読ませる。目標タイムは指導者が決めるが，1回目のタイムを児童に告げ，2回目の目標を児童に自分で決定させる方法も有効である。児童が自ら立てた目標が1回目と2回目の差が大きいほど効果的であると感じている。また，1回目は読むことに集中させるが，2回目，3回目の読みが終了したところで，文章の内容の読み取りをすることもある。なお，目標タイムに達しなくても同一指導時間内では3回読んだら終了して，次の指導時間に持ち越している。あまり，回数を重ねると児童の意欲がそがれることが多いからである。基本として，高学年になると，読速度だけでなく，文章読解とも組み合わせ指導していく。

**4）作図技術の向上指導**

ものさし，分度器などの細かい目盛りを読む学習は弱視児にとって苦手意識が育ちやすいところである。ましてや，近用弱視レンズを使いながら作図器を操作し，正確に作図することが出来るまでには相当の指導時間を要する。そこで，学年に応じて作図器に慣れること，繰り返し使用することで苦手意識を少なくするようにしている。広島大学において作成された「弱視児用作図指導プログラム」を基にして，一斉授業の流

れを踏まえ，算数の単元に沿った内容をスモールステップ化して指導にしている。１年生時は長さを測るという学習はないが，学校生活の中ではものさしを使う場面はたくさんある。線を引く，点結びをする，形をかくといった内容に取り組み，２年生以降は算数の単元の内容に沿って作図に取り組んでいる。

指導の根底に置いているのは，近用弱視レンズ等の視覚補助具を用いながら，どこでも購入できる市販の作図器を使い，自分の力で作図できる力を付けるということにある。確かに視覚障害者用のものは使いやすいが，すぐに購入しづらかったり，小学校の授業の中で使用しづらい場面があったりする。視力値や見え方にもよってもどのような作図器が望ましいのかは変わってくるが，できる限り近用弱視レンズなどを活用するか，市販のものを使いやすく改良するかしてクラスの友だちが使っていると同じものを使用できるように練習することにしている。

**５）用具の使用技術の向上指導**

教科学習の中で，見えにくいために学習用具の使用が困難な場合が出てくる。例えば，低学年でははさみやのり，色鉛筆，絵の具など，中学年では理科の実験器具，彫刻刀など，高学年では，家庭科での調理器具，裁縫道具などが挙げられる。これらが実際に一斉授業の中でどのように使われるかを把握し，それぞれ付けておきたい力を学年毎に取り出してプログラム化している。特に用具の使用で配慮が多い教科としては，図工，理科，家庭科などが中心となる。しかし，指導時間が少ないため，全ての用具に関して指導でき，解決できるかというとそこまで至っていない現実がある。

**６）視知覚学習**

見えにくいために見る経験が少なく視知覚が落ち込むことがある。視知覚の力が高まることは，学習の基礎（読む・書く）を支える上で重要であると捉えている。例えば，目と手の協応が正確にできないと運筆がスムーズにできない。図と地の弁別ができないと模写することや板書を視写することに困難さを示す。知覚の恒常性が落ち込むと図形の形や大きさが正確に捉えられず，空間位置の知覚や空間関係の知覚が落ち込むとノートの適切な使い方ができなかったり，図や絵や表など広がりを持つものが正確に大きさを捉えて視写できなかったりということが出てくる。

そこで，まず，フロスティッグ視知覚発達検査を実施して児童の視知覚の実態を５つの領域に分けて正確につかむことにしている。そのプロフィールを基に，本来は相対的に得意な領域もあわせて指導を行いたいが，指導時間の関係で相対的に落ち込んでいる領域を重点的に指導している。指導を進める際には，フロスティッグ視知覚学習ブックを参考にして，自作の視知覚教材を用いて指導している。

**７）教科補充的指導**

児童の実態に応じて教科の補充なども行っている。見えにくいために把握が困難な学習などについては，その都度担任と連携を取りながら先行的に指導する場合と復習として指導する場合がある。さらに，直接的には見えにくさとは関係がないと考えられる場合であっても学習内容の理解のために教科の内容を指導する場合もある。また，児童の方から，できなかったことがあると「目の教室で練習したい」と伝えることもあり，そういった場合にはすぐに練習をするようにしている。

## ３．集団による学習形態の確保

普段は個別の授業であるが，指導内容によっては，調理実習や実験など集団での学習の場を設けることもある。さらに，集団による指導の場を意図的に設ける利点として，例えば弱視レンズを在籍学級で使うことに抵抗感を感じている児童には特に有効である。弱視レンズを友達と一緒に使用して，同じようにがんばっている友達がいるということを実感することで，乗り越えようと思う気持ちも生まれてくるようである。そのためには，日常の中での見えにくいことや不合理なことを気軽に話せるという人間関係を児童自身で形成していけるような配慮も必要となる。通級指導教室だけでなく，在籍学級にも家庭にもそういった環境を作っていくことがさらに心の支えになると感じている。

集団で行う学習にもう一つ校外学習がある。日頃，教室内で練習している弱視レンズは，児童にとっては学習の場で使うものであり，最終的には社会生活のいろいろな場面で活用してもらいたいと願っている。そのため，学習以外の場面での活用について小学生のうちから経験させ，その必要性を感じ取ってもらいたい。そこで，主に公共の交通機関の利用などについての校外学習を組んでいる。この学習は，一人で行うと周りの目が気になって弱視レンズを使うことが恥ずかしいという思いが生じることが多い。しかし，集団で行うと安心感が生まれ，積極的に使用できるため集団での学習が望ましいのでは無いかと実感している。目的地までの時刻表を調べたり，バスや電車の行き先を調べたりして，実際に目的地まで移動し，目的地での学習も在籍学級での校外学習とは異なり，弱視レンズを活

用する場面を多く設け，じっくりと見る活動を中心に取り入れている。また，人数によっては，弱視レンズの使用の指導の充実，安全の確保のため，広島大学で視覚障害教育を学ぶ学生にボランティアで指導の補助にあたってもらうことも多い。こういう経験を通して児童は弱視レンズの使用の大切さだけでなく，人間関係，周りの状況把握の大切さなどいろいろなことを学んでいる。

### 4．評価の方法

指導計画の中には，指導内容に基づいて評価基準を設定している。通級指導教室で中核をなす弱視レンズ活用訓練はプログラム内に定められた合格基準を参考にして児童に合わせた合格基準を設定し評価につなげている。作図技術向上指導の場合は，プログラム内の定められた合格基準で1mmのくるいもないようにかなり正確な作図をすることを要求している。その他の指導内容については，学年の評価基準を参考して，達成のようすを記述評価している。

保護者への評価の伝達は「目の教室　あゆみ」として学期毎に作成している。その際，合格基準が達成できたかどうかだけを記すのでなく，達成するための工夫，手立て，支援など児童の今後の学習活動に参考となる事項は文章として記述している。そしてできる限り，児童の活動の方法や支援を具体的に書くように心がけている。なお，このあゆみは，在籍校にも送付することといている。

さらに，保護者とは毎回の指導後に相談等の時間を設定するのみならず，学期毎に懇談の場を設けている。指導内容，評価について客観的に説明し，保護者とともに次学期の指導計画を見直すようにしている。

## Ⅳ　実践的研究の反省と課題

実態把握をすると課題が見えてくる。それに優先順位をつけながら年間約70時間～105時間という限られた指導時間内でできる内容を組み立てる。児童一人ひとりに実は急ぐべき課題があり，1回の限られた通級時間の中で指導を着実に積み重ねていく。さらに，将来の生活を踏まえた上でその指導が適切であったかどうか，自分が行っている指導内容が正しいかを一人ひとり丁寧に見ていく必要がある。その方法としては，これまで指導の中でつけた力を児童が活用して，学校生活を快適に送ることができているか否かを真摯に考え続けていくこと，通級が終了し中学校に進学した生徒たちの様子を追ってどのように生活しているかを把握することだと考えている。

まず，児童が快適な学校生活を送っているかどうかについては，在籍学級に定期的に訪問していくことでよくわかる。しかし，現状では，時間の制約もあり定期的には訪問することができない。そこで，児童が客観的に自分のことを語ることができるようにしておくことが重要となる。これが可能になることにより，場合によっては児童への直接的な指導を即時的に展開できたり，また担任と連携を取って環境を整えたりする取り組みも行えてきた。しかし，対処療法的に対応している場合が多いのも事実である。困難さを事前に予期したり，はやめに啓発に取り組んだりしなければならないと反省している面も多い。

次に，中学生になってからの生活の把握は，小学校卒業後も進学した中学校と連携を取りすすめている。具体的な連携は，視力検査等の補助を行ったり，授業参観を行わせてもらったりして継続的に学習や生活の様子を見ていくようにしている。その中で，小学校でつけた力をどのように生かしているか，どのような力が足りなかったのかを把握している。小学校卒業の際は，どの児童も通級を終了するということがとても不安のようであったが，現在は，それぞれの中学校で自分のことを受け止め，小学生時代に身につけた力を活用して，高校受験に向かってがんばっている生徒が多い。このことは，当然，中学校進学後の教育の成果でもあるが，通級指導教室での指導方法及び内容は大きな枠組みとして正しかったと考えている。ただし，今後もいろいろな指導方法を研修し深め，専門性を高めていきたいと考えている。さらに，児童や保護者のニーズをくみ取ると同時に，将来の必要な力もしっかりと説明でき理解を得られるように実践を深めていきたい。その際の根底には，将来自立する子どもの姿を思い浮かべながら取り組みを進めていくことではないかと考えている。

## 引用・参考文献

稲本正法・小田孝博・岩森広明・小中雅文・大倉滋之・五十嵐信敬（1995）教師と親のための弱視レンズガイド．コレール社．

出濱大資（2001）パーソナルコンピュータを用いた弱視レンズ訓練素材の作成－液晶プロジェクターの活用を中心として－．広島大学学校教育学部盲学校教員養成課程卒業論文．

原口倫子・吉野淳子（2003）弱視教育現場に常備すべき教材について－公表されているプログラム等の整理を中心として－．広島大学学校教育学部盲学校教員養成課程卒業論文．

樋口正美（2005）本川小学校弱視通級指導教室の現状と課題について．広島大学大学院教育学研究科附属障害児教育実践センター研究紀要，(3)，37-45．

フロスティッグ視知覚学習ブック（1978）日本文化科学社．

日本版フロスティッグ視知覚発達検査（1977）日本文化科学社．